

## 長崎大水害による東長崎中学校の被害

近 藤 功 (長崎市東長崎中学校)

7月23日の水害後、東長崎中学校へ行くことができたのは3日後の26日であった。大草を回って古賀までは、自家用車で2時間くらいであったが、古賀から4km程の中学校まで3時間もかかった。滝の観音入口から先へ進むにつれて、東長崎地区の被害のすさまじさを知ることができ、予想以上の被害状況に驚いた。途中、中学校の生徒達に出会い言葉を交したが、彼らの疲労感は痛々しかった。このとき、始めて生徒一名の死を知った。

中学校へ着いて、被害の様子を見たが、言葉が出なかった。めちゃくちゃとしか言いようがなかった。玄関前のロータリーには、流出物が二階の高さまで山積みされていたし、職員室は先生方の机や道具類がひっくり返って散乱し、床に立つのが不可能に近い状態であった。床に積った泥も20cmはあり、足を踏み入れることさえ容易ではなかった。体育館は、床板が水のためにふくらんでめくれあがり、使用不能の状態。運動場は、表土が流出し、石ころだらけ。どこから流れて来たものか、数台の自動車が散在している。学校裏の八郎川の中にも、ひっくり返った車などが多数あった。

本校は、音楽室を除き特別教室が全て一階にあり、それらの部屋の中も職員室同様であった。水害ピーク時の水面は、校舎床面から160cmくらいであり、そのため、木製の棚や机は傾き、倒れ、ひっくり返り、手のつけられない状態であった。

翌々日からだったと思うが、職員が集まり、片付けにかかったが、室内では自由に身動きもできないほどであったから、作業はなかなか進まずに、時間ばかりが過ぎて行った。市内外の

学校の先生方も応援にかけつけて来て下さり、少しずつ片づいて行った。散乱した大型・小型の道具類の運搬、床に堆積した泥のかき出し。連日、これの繰り返しである。床などに残った泥は、八郎川からポンプで吸い上げた水で吹き飛ばしたが、それも泥水のため、なかなか泥が消えないのは、悲しくさえなった。8月10日頃になって、ひと通りの片付けが済んだ。

盆が明けてからは、細かな作業である。器具類などの中で、使用可能なものと不可能なものを選別、使用できるものの水洗い。この頃になると、水道が使えたので、最終的な泥出しなどの作業には水も使った。

今でも信じられないが、あの被害状況で、二学期の始業を、よく9月1日に行うことができたものだと思う。しかし、その後も教師と生徒が共に学校中の整備を続け、あたりまえに授業ができるようになったのは11月頃であった。

自然が、たった数時間でなし得たことを、私達は何ヶ月もかかって、もとの状態に戻すことができなかったことを思うと、今さらながら、自然の力の大きさに畏怖の念を感じずにはいられない。

この原稿を書くように要請された時に、正直なところ、どう書けば良いのか困った。言葉や文章で表すには、当時の状況はすさまじかったし、目に浮かぶままに書くと、数10ページにもなるだろう。「できれば、写真も」と言われたが、市教委報告など、必要最少限のものを撮っただけで、個人的に被害状況を写す余裕もない程、実際面でも精神面でも、全部の先生方が忙しかったことを付け加えておきたい。